月灯公園

樗 みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月灯公園

【Nコード】
N2448H

【作者名】
樗　みのり

【あらすじ】
　ある月のない夜。ニーナは〈月灯公園〉で、よれよれな姿の、不思議なおじさんと出会います。※「童話」として書いた短編ですが、「ファンタジー」に分類しています。

ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン……

古い、どっしりとした置き時計が九つ、少しこもった鐘の音を打ちました。

部屋に戻り、眠る時間です。

真鍮のドアノブに手を置き、ドアをほんの少し開いてから、ニーナは振り返り、お父さんに挨拶をします。

「おやすみなさい。　父さま」

「ああ。　おやすみ」

暖炉の火に向かい置かれた椅子に、深く腰掛けたお父さんの顔は、斜め後ろからのちょっとしか見えません。

お父さんは、寝る直前まで、会社の書類に目を通したり、新聞に目を通したりと、とても忙しいのです。

ニーナはドアをそっと閉め、灯りのない真っ黒な廊下を歩き始めました。

昨日切れた廊下の電球は、まだ交換していないので灯りは点かず、おまけに、今日は月がすっかり姿を隠してしまう、月なしの夜なので、窓から入る優しい月の光すらない、廊下は、本当に真っ暗な闇でした。

真っ暗ですが、もう十年は暮らしている家の中です。　目をつぶったって、自分の部屋にたどりつけると、ニーナは思いました。

コッチ、コッチ、コッチ、コッチ……

廊下に置いてある、大きな柱時計の、規則正しく刻む針の音以外、何も聞こえません。

お母さんの生きていた頃には、歌声や、笑い声なんかがしょっちゅう聞こえていましたが、お母さんがいなくなってからは、時計の針の音だけが残ってしまいました。

「この音、嫌いだわ」

ニーナは、両手で耳を塞ぎ、目を閉じました。それでも、真っ暗な闇は真っ暗で、時計の音は、ニーナの指を通り抜けて聞こえてきます。

ニーナはそのままの格好で廊下を走り、自分の部屋へと飛び込みました。

灯りを点けていなかったので、部屋の中も真っ暗で、ひんやりとしていました。

暗くて見えないけれど、部屋の右には、お母さんといつも一緒に弾いたピアノが置かれています。その上には、お父さんがニーナの誕生日に、外国から送ってくれた、きれいな貝細工のオルゴールが置かれているはずです。

お母さんがいなくなってから、部屋のピアノを弾くことも、オルゴールを鳴らすことも、ニーナはしなくなっていました。ピアノの音も、オルゴールの音も、聞くと、天国へ行ったお母さんを思い出して、悲しくなるだけだからです。

部屋はいつも静かで、小振りの置き時計が、チクタック、チクタック、というくらいです。

けれど今夜は、いくら耳を済ませても、そのチクタクの音は聞こえてきません。

それに何だか、いつも以上に暗いし、寒い気がするのです。

今は十二月。　昼間の空は灰色で、雪も舞おうかという季節です。
寒いのは当然です。
けれど、家の中にいるとは思えないような、ひしひしとした、肌に針を刺すような冷たさが、手足だけでなく、全身を押さえつけます。
ニーナは、肩を抱いて、ぶるると震えると、ふと、上を見上げました。

見上げた先には、きらきらと小さな光がいくつも瞬いています。
大きいもの、小さいもの、白いもの、赤っぽいもの。　数え切れないほどの光が、ニーナの上にあります。
ニーナは寒かったのも忘れて、大きく目を見開き、もう一度その光たちを、よく見なおしました。
それは星でした。
つややかな黒いビロードに、宝石をちりばめたような、広い星空でした。
夜の女王である月の姿はなく、お供の星たちだけが、主のない夜空を守るように、金に銀に光り輝いているのです。

時々、白い靄が星の上にかかります。
よく見てみると、それは自分の吐く白い息なのだと、ニーナは気が付きました。

「寒いわ」

ニーナは、寒いことを思い出しました。
昼間でも、暖かな上着がないと、寒くて凍えてしまいそうなのに、夜だったらなおさらです。
寒くて、身体がぶるぶると震え、歯ががちがちと鳴り続けます。

薄い部屋着しか着ていないニーナの、スリッパの足は裸足です。どうして、こんな薄着をしているのだろうと、肩を懸命にこすりながら、ニーナは自分にちょっと腹を立てました。

あたりは静かで、なんの音も聞こえません。

月の光もないので、全てが夜の黒にとけてしまい、ここがどこなのかも、自分がここに本当にいるのかも、分からないほどでした。

ニーナは右足をそろりと一歩、前に進めました。　次に左足をそろり前へ、その次には右足をまたそろりと。

一歩、一歩、そろり、そろりと前に出しているうちに、自分の立っていた前には、道が続いているのだということが分かりました。

「でも、この先に穴があいていたら、落ちちゃうわね。　もしかしたら、崖があるかもしれない。　見えないのだもの」

ちょっと怖いな、と思いましたが、ニーナは一歩、一歩、地を擦るように、ゆっくりと、慎重に足を前へ出していきました。

どれくらいか前に進んだ頃、遠くに黄色いまるい点が、ちらりと見えました。

黒い闇の中で、その点はとても温かい色をしていました。　ニーナは、その黄色の点に呼ばれるように、さっきまでよりも早く、一歩、一歩と、足を進めました。

ずいぶん遠いだろう、と思っていましたが、気が付くと、ニーナはいつの間にか、点の目の前にまで来ていました。

黄色い点は、街灯の灯りだったのです。

近くで見ると、その灯りはとても優しくて、まるで、柔らかな月の光のようだと思いました。
まるい、花のつぼみのような街灯の下は石畳で、そこには、公園にあるような、長い大きなベンチがひとつ、置かれています。

ベンチには、男の人が一人、座っています。
黄色い灯りの下にいるその男の人は、ちょっとくたびれた格好をしていました。
よれよれの、古い黒のコートは煤けているようです。ぼんやりと空を見上げている横顔には、無精髭が生えていて、いつもきれいに髪を整え、ネクタイに背広を着ているニーナのお父さんや学校の先生とは、大違いでした。

ニーナが、まじまじと見ているのに気が付いたのか、男の人はゆっくりと顔をこちらに向けると、少しおや、という顔をして、それから、にっこりと笑いました。

「こんばんは。寒いね」

男の人は、人なつっこい笑い顔のまま、ニーナに挨拶をしました。

「こんばんは」

消えるような小さな声で、ニーナも挨拶を返しました。

「そこは灯りが届かないだろう？　どうだい、ここに座らないかい？」

男の人は、座っている場所を少し、横にずれると、ベンチの上をぽんぽんと叩きました。

ニーナは、少し迷いましたが、男の人の横に、ちょっと、離れて座りました。
近くで見ると、男の人はやはりよれよれで、コートの裾などは擦れて、ところどころボロ布のようになっています。にこにこと笑う顔は、ニーナのお父さんよりも、若いように見えますが、中途半端に伸びている髭や髪のせいで、若いのか年なのか、よくわかりません。

男の人は、ニーナが座ったのを見ると、にっこりと笑って、また空を見上げました。
ニーナもつられて、夜空を見上げました。
二人ともなんにも言わず、ただじっと、空を見ていました。街灯の灯りがあるためか、星の光は、ニーナが最初に見上げた時よりも、淡く、小さく見えます。

「おじさんは、星の観察をしているんですか？」

男の人は、黒い目を大きくしてニーナの顔を見ると、少し困ったような、それでいて愉快そうな顔をし、笑いながら頭をかきました。

「あはは。おじさんかぁ。そうだなぁ、君くらいの子から見ると、僕はもう〝おじさん〟だろうね。昔は君と、同じくらいの少年だった頃もあったし、今だってまだ、若いつもりでいるんだけれど、君から見たら、おじさん、だね」

ニーナは、失礼なことを言ったかしら、と思いました。自分のお父さんより若かったとしたら、まだ三十歳を超えたか超えないかです。
やっぱりおじさんは失礼かしら？　でも、お兄さん、というのもちょっと妙だわ、と思いました。

「あの、私の名前はニーナ、といいます。　お名前、伺ってもいいですか？」

おずおずと、男の人の顔を見上げながら、ニーナは尋ねました。

男の人は、また目をまるくしてニーナを見ると、その後しばらくして、それまで以上の、満面の笑みを浮かべ、じっくりと、ニーナの顔を見つめました。

「君は僕の事を”怪しい奴”とか”危ない人さらい”とか”変質者”とか思ったりしないのかい？　こんな夜更けに、こんな公園のベンチに一緒に座って、自分から名前を教えるなんて！　今時の学校では、知らない人間には、むやみに自分の事を話してはいけないって、教えられているって聞いたけれど？」

ニーナは少し困った顔をして、答えに詰まってしまいました。

「こんな夜遅くに、こんな場所にいたことを知られたら、父にも先生にも、きっと叱られると思います。　自分でも、どうしてこんな所にいるのか、分からないし、どうして名前言っちゃったのか、分かんないです。　でも、どうしてだろう？　さっきから、夜の空の下に立っているのに気が付いた時から、寒いし、怖いし、止めておけばいいのに、って思うのに、身体が勝手に前に動くの。　知りたいと、思うと、口が喋るの。　名前を言ったのは、相手の名前を知りたかったら、まず自分の名前を名乗るのが礼儀だって、母が、いつも言っていたから——」

男の人は、あごの無精髭をなでながら、ニーナをじっと見ました。あんまりにもじっと見つめられるので、ニーナはなんだか、居心地が悪くてしかたがありません。

「私、何か変なこと言いましたか？」

男の人は、それでもしばらくニーナを見ていましたが、また、にこりと笑って、夜空に目を戻しました。

「感動していたんだよ。　僕に名前を聞く人なんか、もう、何百年もいなかったからね」

「何百年、って、何年ですか？」

ニーナは思わず、椅子の上でにじり寄るようにして、男の人の顔を覗き込みました。

ふむ、とひとこと言うと、男の人はコートのポケットから、小さな丸いものを取り出し、ほら、とニーナに見せました。

「小石ですか？」

「小石、に見えるかい？」

男の人はにこりと大きく笑うと、小石を大きな手の内に握りこんで、ふっと、白い息をかけました。

ニーナがじっと見つめていると、男の人は握ったままの手を前に突き出し、空に向かって、ぽい、と小石を投げました。

小石が落ちてくる、と思い見ていると、空からは雪のように白い布が、ゆっくりと、舞うように降りてきました。

白い布は、大きなショールでした。

男の人は、ショールを大きく広げると、ぽかんとしているニーナの肩に、ふわりとかけました。　暖かくてやわらかなショールに包まれて、ニーナの身体はとてもほっとしました。

「寒い時には上着が必要だよ」

「どこから、このショールをだしたんですか？　おじさんは、魔法使いですか？」

ニーナは目を大きくして、ショールと男の人の顔を見比べました。男の人は相変わらずにこにことして、夜空を見上げていました。

「魔法使い。　そうだね、そういうことに、しておこうか」

ニーナは、お話しの中にしかいないと思っていた魔法使いが、こんな近所にもいたのだと驚き、少し嬉しくなりました。

「ここで、何をしていたんですか？　魔法の練習ですか？」

「月のない夜は迷子が多い。　帰り道が見えなくて、分からなくて、道に迷ってしまうんだ。　そんな人たちの、話し相手でもしようかと思ってね」

男の人は、自分を迷子だと思っているのだと、ニーナは思いました。

「私は迷子なんかじゃありません。　私、一度だって迷子になったことなんかないです。　ちゃんと、自分一人でどこにだって行けるし、ちゃんと、自分で帰れます」

男の人は一瞬笑いをひっこめ、ニーナの顔を見ると、またポケットから小石をひとつ取り出し、笑顔を戻して、ニーナの小さな手に乗せました。

「これをあげるよ」

手渡されたのは、半透明の淡いミルク色をした、まるで月の光のような、とても優しい色の石でした。

「きれい。　でも、この石何ですか？　どうして私に、これをくれるんですか？」

ニーナは、小石をささげ上げるようにしながら、男の人の顔を見上げました。

「それは種。　君は、僕の名前を聞いてくれたから、そのほんのお礼だよ」

にこにこしている男の人の目は、とても優しくて、暖かな黒色でした。

お父さんの目も、黒い色だったはずですが、ニーナはずいぶんと、お父さんの目を、こんな風に前から見たことがないと思いました。

「ここは月灯公園といって、月なしの夜に、道に迷って疲れた人が、一時の休息をするための場所なんだ」

「げっとうこうえん？　そんな公園、私の家の近所には、なかったけれど……」

男の人は、大きな手で、ニーナの頭をごしごしとすると、空に目を移しました。

「この公園は、君の家の近くでもあって、遠くでもある。　僕は、

ここでこの街灯の守番をしている、点燈夫、のようなものかな。
この街灯の灯りは、月の光を集めておいたものを、月なしの夜にだけ灯しているんだ」

「ひとりで、やっているんですか？」

「ひとりだよ」

「こんな寒い夜に、ひとりで、怖く、寂しくないですか？」

「そうだね。寂しいし、退屈なこともあるけど、星空があるから。星たちはとてもおしゃべりで賑やかだからね」

男の人は、空を支えるように、右手を高く上げました。

「星が、おしゃべりをするんですか？　私には、何にも聞こえないけれど」

「君には君の、聞く音が、声があるから、聞こえないんだよ」

ニーナは、ショールの裾を引き合わせて、身体を小さくしました。

「私の聞く音は、時計の針の音ばかりだもの。一年前までは、母さまの笑う声や、ピアノの音や、歌う声があったけれど、なくなっちゃったもの」

「その時に、時計はなかった？」

「ううん。あった。でも、あんな大きな音には、聞こえなかった」

「お父さんは、いるんだろう？　お父さんと歌ったり、ピアノを弾いたりはしないのかい？」

ニーナはうつむいて、膝の上を見つめました。

「父さま。外国から帰ってきたの。母さまがいなくなったから、五年ぶりに、家に戻ってきたの。でも、お仕事が忙しいから、いつも横を向いているわ。母さまも言っていた。父さまはお仕事が忙しくて、大変なのだって。父さまは、時計の音にあわせて、時間正しく動くの。私にも、寝る時間と起きる時間を、守らせるわ。父さまは、時計の音しか好きではないの。歌もピアノも、きっと、興味なんてないのだわ」

「五年かぁ。僕には、長くない時間だけれど、君達には、短くない時間だね」

男の人は、ふむ、と言うと、ベンチからゆっくりと立ち上がり、ニーナの手を取り、優しく立ち上がらせました。

「街灯。見えるだろう？　その先には星も見える？」

黄色い暖かな光を灯した、まるいつぼみのようなガラスの覆いの付け根は、まるで花の額のような、六つの細くてきれいな曲線の金具で支えられていました。

まるいつぼみの光の先には、小さな星たちが、街灯の灯りの黄色いベールを羽織ったように、淡く、静かに輝いています。

「それじゃあ、しっかりつかまって」

男の人はニーナを、すくい上げるように抱きかかえました。びっくりして目を丸くしているニーナの顔を見ると、男の人は優しく笑い、目をつぶるように言いました。
ニーナはわけの分からないまま、目をつぶって、しっかりと男の人につかまりました。
ゆらりと、船にでも揺られているように、身体が揺れました。

「もういいよ、目を開けてごらん」

風が吹いているのを感じました。
目を開けると一瞬、どこを見ていいのか、分かりませんでした。
真っ直ぐ前は、真っ黒な闇でした。

「下を、見てみて」

男の人に促され、ニーナは足下を見ました。
ニーナは、男の人に抱えられ、空に風船のように浮いていました。
足下には、暖かな、小さな黄色の灯りが見えます。　それは、あのつぼみのような街灯でした。
街灯のつぼみは、小さな冠のような帽子を、円い頭の上に乗せていたのだと、初めて分かりました。　その下には、もっと小さく、さっきまでニーナが座っていたベンチが見えます。　上から見ると、ベンチは座る人を包むような、ニーナを呼んで腕を広げたお母さんのような形をしていました。
ニーナは驚きで、言葉が出ませんでした。
そんなニーナを見て、男の人は次に、上を見るように言いました。
ニーナの上には、先程よりも大きく、星達が輝いていました。
街灯の、黄色の光のベールを羽織らない星たちは、ベンチから見たときよりも、何倍もきらきらとしていて、とても賑やかで、きれいでした。

「見ているものは同じだけど、場所が違うと、ずいぶんと違って見えるものだろう？」

男の人も、星たちを見上げながら、穏やかな声で言いました。

「同じ物を見ていても、立っている場所で見える部分は少しずつ違う。　同じ音を聞いていても、聞く時によって、違って聞こえるだろう。　同じ人間が、同じものを見聞きしても、場所で、時で、違うように見え、聞こえるのなら、違う人間が、自分と同じものを見たり、聞いたりしたとしても、ずいぶんと違ったものに、見えたり、聞こえたりしているかもしれないね」

ニーナは、男の人の顔をじっと見つめました。

男の人も、ニーナの顔をみて、にこりと笑いました。

「お父さんも、昔は、君と同じくらいの少年だった時があって、青年になって、お母さんと出会って、好きになって、結婚して、君のお父さんになった。　その間に、お父さんはどんなものを見て、聞いてきたんだろうね。　もしかしたら、君の見えていないところで、お母さんと歌を歌ったり、ピアノを弾いたりしていたことも、あったかもしれない」

「父さま。　ピアノを弾いたかしら？　どんな歌を、歌ったかしら？」

「それは、お父さんに聞いて見ないと、分からないね」

いつの間にか、ニーナと男の人は、ベンチの前の石畳に戻ってい

ました。

「帰り道、わかりそうかい？」

男の人は、ニーナの頭を、またごしごしとしました。大きな手は、とても暖かでした。

「たぶん、帰れると思います」

「うん、帰れるよ」

ニーナは、一歩、右足を踏み出しました。擦るようにではなく、はっきりと、次には左、次には右を。

街灯の灯りが届かなくなる所で、ニーナは振り返り、男の人を見ました。男の人は、また一人ベンチに座り、やはりニーナを見ていました。

「もらった小石。種は、どうすればいいんですか？何の種ですか？どうしたら、芽が、でるんですか？」

「種は、君の好きに育てたらいいよ。土に植えても、袋に入れて、ポケットにしまっても。お父さんにあげたっていい。時が来たら、芽は、でるものだよ」

男の人は、ひらひらと手を振って、ニーナに、先に進みなさいといいました。

「名前、もう一度、聞いてもいいですか？」

男の人は、目を丸くして、そして、またにっこりと笑いました。
「ルーナ。　似ているだろう、君の名前と」
「ルーナさん。　またいつか、会えますか？」
「君がまた、道に迷ってしまったら、会うかもしれないね」
でも、そんなことにはならない方がいいよ、とルーナは、星空を見上げながらいいました。

窓から入る、朝の光でニーナは目を覚ましました。　ベッドの上には、白いショールが置かれていました。
まだ眠たい目をこすると、手の中に、何か硬いものを握っていました。
広げてみると、それは小さな石でした。
朝の光を受けて、半透明の優しい白色の石は、柔らかな光を、そのなめらかな表面に湛えていました。

先に食卓のテーブルに着いていたお父さんは、新聞を読みながら、コーヒーを飲んでいました。
いつもならニーナは、その新聞の陰のお父さんに、ちょっとだけの挨拶をするのですが、手の内の小石を握り締めると、ニーナはお父さんの椅子の前に立ちました。
椅子のすぐ側に立つと、普段は見えなかったお父さんの頭の上が、よく見えました。

今まで気が付きませんでしたが、お父さんの頭には何本か、白い髪が混じっていました。

「父さま。おはよう」

ニーナのいつもと違う行動に、お父さんは少し訝しげな顔をしましたが、「おはよう」と挨拶を返してくれました。その後に、少し驚いた顔になって、大きくなったな、といいました。

驚いて大きくしたお父さんの目は、濃い茶色をしていました。

「私、父さまに、教えて頂きたいことがあるの。この種の育て方。分からないの。何が咲くのかも分からないの。くれた人は、時が来れば、芽は出るものだからって。私、お花を育てたことがないから、もしかしたら、父さまのほうが、外国のお花なんかもたくさん知っていて、何か分かるのではないかと思って――」

お父さんは、ニーナの手から、小さな淡いミルク色の種を取り、光にかざし、じっくりと見ました。

「これは、お母さんが好きだった月長石に似ているが、いったい、何の種なんだろう？」

「母さまは、月長石、が好きだったの？」

「そうだよ。月の光のような、優しい石が好きだった。音楽も、夜想曲が好きで、よく父さんに、弾いて聞かせてくれた。父さんにも、その曲が弾けるようにって、ピアノを教えてくれたりもしてね」

「父さまも、ピアノを弾いたの？」

ニーナは、目を大きくして、お父さんの顔を見ました。
お父さんは少し照れたように、手の中の種を確かめるように見ながら、答えました。
「ニーナが生まれる、ずっと前のことだよ。　それより、この種のことを調べるのには、ちょっと、時間がかかるかもしれないね」
置時計も柱の時計も、昨日までと変らず、規則正しく時間を刻み、コッチコッチコッチコッチといっているはずです。
けれどもそんな音は、ニーナとお父さんの耳には入ってきませんでした。
半透明の小さなミルク色の種。
あの種は、いつ、どんな芽をだしたと思いますか？
その答えは、ニーナとお父さんだけが、知っています。
ニーナは、それから一度も、月灯公園に行くことはありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2448h/

月灯公園

2011年5月12日09時15分発行